

当院における人間ドックでの腹部エコー検査の現状と展望

○佐藤 由紀, 亀井 住子, 近藤 洋子, 内藤 博之, 高田 裕之
(医療法人 北関東循環器病院)

【目的】

当院で行っている人間ドックにおける腹部超音波検査について有所見率、要精査率などについて検討をすること。

【対象】

2008年4月から2013年3月までの間に腹部超音波検査を施行した人間ドック受診者、延べ6,415例（男性4,026例、女性2,389例）を対象とした。なお、年次推移は2008年から1,381名、1,300名、1,259名、1,245名、1,230名で、この内新規受診者は年平均141名（11.0%）であった。

検査者は1～2名、対象臓器は肝臓、胆道、腎臓、膵臓、脾臓で、腹部大動脈と下大静脈も合わせて観察を行っている。

【結果】

各臓器の代表的な所見は脂肪肝1,639例（25.5%）、肝嚢胞1,973例（30.8%）、胆嚢ポリープ1,725例（26.9%）、胆石311例（4.9%）、腎嚢胞2,011例（31.3%）、膵嚢

胞50例（0.8%）、脾石灰化23例（0.36%）であった。また、要精査例は肝臓12例（0.19%）、胆道21例（0.33%）、腎臓5例（0.08%）、膵臓4例（0.06%）であった。この他に腹部大動脈瘤を4例（0.06%）指摘し、その内1例は当院にて手術を施行した。

【まとめ】

当院は循環器に特化しており、消化器疾患で精査となった場合は他院にて行われる事が多い。要精査となった後の追跡が困難な例もあるが、無症状の受診者が多い人間ドックでも様々な所見を有している例もあり、検査者の知識や技術、向上心維持の為に所見の指摘だけでなく経過の把握にも注視していくことが重要だと考える。